

テーマセッション7

日常の職場風土に活かす家族看護モデルの学び方
—大学教育と実践現場の連携による実践知の国際的発信のために—
小林奈美、恒松景子、坂之上香（鹿児島大学医学部）
植屋明代（ナカノ訪問看護ステーション）

1. はじめに

家族看護学会が設立されて10年余、様々な家族看護の理論やモデルが紹介されてきた。その多くは、北米で開発された看護学の理論・モデルおよび家族社会学、家族心理学、家族療法の理論を基礎としている。一方で、従来、日本各地の臨床現場では、そのような理論・モデルという説明の道具を用いずに「感」や「経験」に基づいたその土地ならではの家族文化に適した形の家族支援が展開され、そのような実践知を理論・モデル化する研究も取り組まれてきた。しかし、IT革命に代表される情報の国際化、家族形態・家族文化の多様化は、もはや無視できない速さで進行しており、日々更新される新しい国際的な動きと日常に繰り返される実践との狭間で、いかにバランスの取れた家族看護を実践するか、ということの議論は十分ではない。そこで、本テーマセッションでは、発表者の実践している2つの事例：演劇製作を用いた家族看護モデルのグループ学習と、訪問看護ステーションとの事例検討会を題材に、「次の日の看護サービス」に活かすために、大学教育と実践現場は互いに何を学ぶことが必要かについて、議論の場を設けたいと思う。

2. 事例：プロセスと実映像の紹介

- ① 鹿児島大学3年生を対象に行っている演劇製作を用いたグループ学習法であり、「病と家族の苦しみとの関係を理解する」ことを主要テーマにしている。学生は、演劇製作のプロセスの中で Calgary Family Assessment/ Intervention Model の主要概念を学ぶ。
- ② ナカノ訪問看護ステーションと筆者の研究グループが協働で行っている事例検討プログラムである。特定の家族アセスメントモデル、介入モデルの学習は行わずに、「家族看護」の考え方を取り入れた事例検討を行う。

3. 討論したいこと

筆者は、日々の家族看護実践において最も重要なのは家族看護の考え方を身につけるとだと考えている。したがって、「～理論」「～モデル」に厳密に即した実践にこだわる必要はないと考えているが、一方で、一つのモデルを教育および実践に取り入れ、効果を上げているところもあろう。教育・研究を担う大学機関と実践現場が協働し、利用者にとってより良い看護サービス提供に繋げるために、「家族看護」という枠組みの中で互いに共有すべき情報や概念は何か、また連携を促進し、協働して作り上げていく実践の中で、国際的に発信できるユニークな要素は何かということ进行讨论したい。事例は題材であって、その場の討論を優先する。実践及び教育の現場からの討論への積極的な参加を望む。